

# 福井 洞窟

Fukui cave



- 国道
- 県道
- 市道
- 電車
- 見学ルート
- 主な見学場所
- 石橋群
- 周辺文化財
- 福井洞窟とガイド施設建設予定地
- 福井川橋梁・吉田橋梁・吉井川橋梁

住所 吉井町福井字岩下1013 駐車場 あり(無料)  
 交通 国道204号「住吉」交差点から 見学時間 9~17時(年末年始を除く)  
 福井洞窟・直谷城址方面へ 連絡先 佐世保市教育委員会  
 西肥バス松浦行・下福井バス停 文化財課  
 から徒歩5分 TEL(0956)24-1111

スマートフォンサイトは  
こちらから



<https://www.fukuicave.jp/wg/>

佐世保市教育委員会

-Sasebo City Board of Education-



日本列島の南西部に位置する佐世保市。  
 そこは、大陸からみた「東の玄関口」です。  
 時をさかのぼること1万9千年前、  
 私たちと同じ「ホモ・サピエンス」がユーラシア大陸で  
 洞窟の壁面に原始絵画を描いていた頃、  
 既に東アジアに渡っていた人類は  
 草原や洞窟をあちこち遊動しながら  
 生活する「狩猟採集」の生活を営んでいました。  
 その頃の暮らしぶりが、他の遺跡と比べて  
 際立ってよく残っている遺跡が  
 この「福井洞窟」です。

# 福井洞窟

そもそも日本列島に人類が進出したのは約4万年前の旧石器時代。寒冷な氷河期を生きた旧石器人は、オオツノジカなどの大型獲物を求め遊動生活を送っていました。続く縄文時代は約1万5～6000年前に始まります。だんだんと温暖化に向かっていきますが、そこに至るまでの気候変動は今日では考えられない過酷な環境だったと言われています。そうした過酷な環境の中、人類が生み出した狩猟具が「細石刃」と呼ばれる「組合せによる槍」の道具です。カミソリの刃のような形をしたこの石器は、骨や木の側面に植め込んで使われます。刃が欠けると付け替えがきくだけでなく、刃を増やすことで一つの石からつくる槍などの道具よりも大きな狩猟具を作ることができる革新的な道具でした。

約1万1000年前頃になると、温暖な気候となり森がだんだんと広がって、大型動物に代わってイノシシやツカ、ウサギやタヌキなどの中・小型動物が増えました。素早い動物を狩る弓矢や、煮炊きに使用する土器の出現により、人々は「ムラ」を営んで「定住」ようになります。そこには文物以外にも情報が集まり、技術が継承され、精神性が高まっていきます。こうして作られた文化が縄文文化です。自然と共存・共鳴するその文化は、現在の日本文化の基層をなすものとも言われています。

福井洞窟に生きた人類の痕跡を読み解くことで、旧石器時代から縄文時代への移り変わる、この壮絶な変動期を生きぬいた人類の歴史が見えてくるのです。

福井洞窟

標高：110m  
 間口：16.4m×奥行5.5m×庇高4m



# 01 福井洞窟の発見から史跡指定へ

福井洞窟は松浦市との境に近い九州西北部佐世保市吉井町福井にあります。およそ50年前、日本の歴史の始まりを考える上で重要な発見がこの洞窟でありました。

昭和35（1960）年、当時日本列島の起源を探るために洞窟遺跡を重要視していた日本考古学協会は、旧石器・縄文時代の研究者であった芹沢長介氏、鎌木義昌氏を担当者とする調査団を結成し、昭和39年までに3回にわたる発掘調査を行いました。

この調査の結果、それまで旧石器時代のものと考えられていた「細石刃」と「縄文土器」が同じ地層から見付かり、細石刃文化の中で土器が出現したことを示したのです。旧石器時代から縄文時代への時代の移り変わりについて、発掘調査で層位的に示したことで、考古学史上、重要な成果となりました。

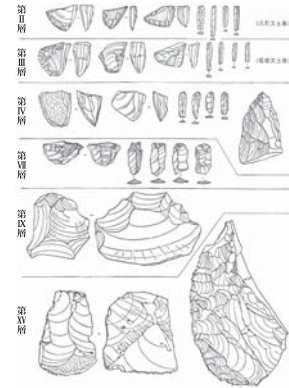
また、芹沢らは、当時としては導入まもない科学分析であった「放射性炭素年代測定法」を用います。各地層の年代を推定し、縄文土器の出現、つまり、縄文時代のはじまりを約1万2700年前にはじまると推定し、その後の年代の指標となりました。

各地層で土器の文様や形が変化することで、縄文土器が年代によって文様などを変えていく過程が明らかになり、発掘された隆起線文土器が日本最古級の土器であると確認されました。

また、最下層の年代は当時の技術の限界値である3万2000年よりも昔と測定され、そこから安山岩製の両面加工石器が出土したことで、「後期旧石器時代」よりもさらに古い「前期旧石器時代」に人類が日本列島に到達した足跡をも秘めていると考えられています。学術上、また歴史上重要な成果から昭和53（1978）年、国の史跡として指定を受けました。



昭和35（1960）年 福井洞窟 第1次調査の様子



昭和35～39年（1960～65）の出土資料  
（鎌木・芹沢1967より転載）

福井洞窟の発見と松瀬順一神社の拝殿わきに昭和十一年の改築建立記念碑がたっている。この改築の際、大きくした神社本殿を安置するため、洞窟の地面を1mほど掘削した。その土砂の中から土器や鉄が地元郷土史家松瀬順一氏により発見され、遺跡として知られるようになる。

松瀬は二十歳ころ芋畑で鐵を見つけたのが動機となり考古学の道に没頭する。また、「書画」「俳句」「えびね蘭」への造形も深く、俳人や考古学者とも親交をもっていた。その功績は吉井町第一号の名誉町民として、また勲六等瑞宝章授与として高く評価されている。

氏の人名をしのぶ家訓が松瀬家に残っている「嘘言わず」。「怒らず」「盗みせず」。

# 02 再発掘調査と史跡整備

平成17（2005）年に旧吉井町と合併し、本市は全国最多となる31の洞窟遺跡を持つ都市になりました。これをきっかけに本市は福井洞窟をまちづくり役に立てるための基本構想を策定し、地域のシンボルとして、教育の場として史跡を整備することが計画されました。この計画の中では、史跡を保存する工事のほか、博物館などで活用するための目的から洞窟の発掘調査を計画しました。

数年にわたる準備の末、平成23（2011）年2月から1年4月間の半世紀ぶりとなる再発掘調査が実現しました。

発掘調査の成果は、その後の整備設計や平成28（2016）年からの整備工事を行うことに活かされました。

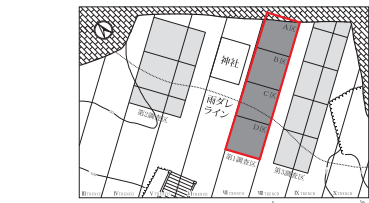
この発掘調査によって、半世紀前の調査よりもさらに鮮明に福井洞窟での暮らしぶりが明らかとなりました。それには、二つの理由がありました。

一つには、科学技術の進歩による新たな分析によって当時の動物や植物、また石材の産地や石器の作りなどが分かってきました。

もう一つには、6mをまっすぐ掘る調査の安全を技術的に確保することによって三次元の写真測量による地層の見直しにより、洞窟の成り立ちの解明につながり、長期的な調査が炉跡や石器づくりの跡の発見につながりました。これは、先学の研究者が遺跡を発見・発掘し、半世紀の間地域住民が史跡を大切に守り続け、各研究者が学術研究の進歩に貢献した軌跡の結果、できたものともいえます。



史跡整備前：洞窟には1960年代に発掘した第2トレンチ（調査坑）がそのままの状態で見学展示していた（左側フェンス）。壁が崩れ、遺跡の破壊が続いていた。



発掘調査：昭和35（1960）年に調査した第1トレンチを再び再調査した。



史跡整備後：トレンチは埋戻し人工物は撤去した。洞窟には神社のみが安置されている。日本固有の景観を保っている。

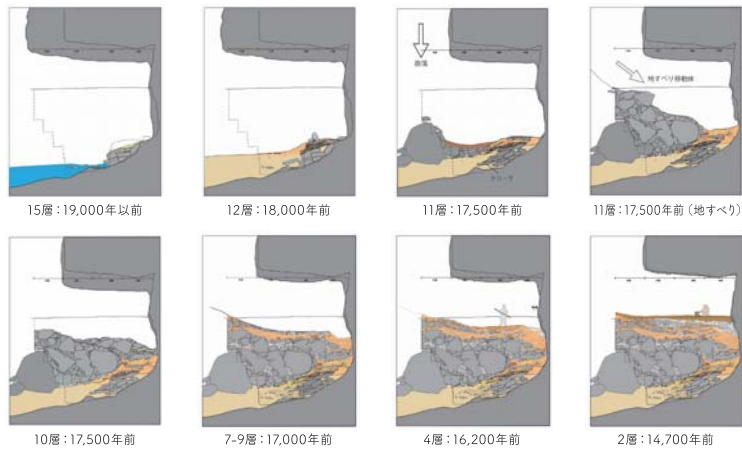
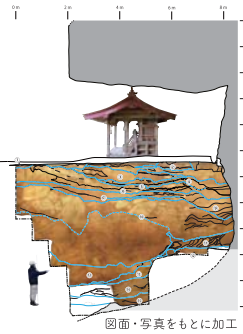
### 福井洞窟の過去から現在まで

地層は15層からなり、約1万9000年～1万年前の約9000年間にわたるものを確認しました。各層からは細石刃を中心とした石器や土器が約7万点出土したほか国内の旧石器洞窟では初めて炉跡や石敷を発掘しました。

残念ながら福井洞窟の始まり(14・15層)の年代は、はっきりと分かっていませんが、福井川により砂が削られたり、溜まったりする環境で川の影響がない時に旧石器人が洞窟にきて石器を作っていたようです。1万9～8000年前(13・12層)になると洞窟での暮らしぶりがはっきりとします。洞窟の中心からやや奥側に火を焚いて周りで石器をつくり、食事をしていたことが分かっています。

1万7500年前(11・10層)には、洞窟の横の地すべりをきっかけとして洞窟天井が落石し土砂が入り込む大規模な災害が起こっています。当時の人類は生活することが困難となり、洞窟から離れて生活していたことが想像されます。しかし、それほどなくして、また同じように石器づくりや火を焚いた痕跡が残っています(1万7000年前;7～9層)。この頃の洞窟は入口が狭く奥が深いほら穴のような地形で奥側はジメジメした水たまりなどがあったと考えられます。

1万6200年頃(4層)になると落石などが段々と少なくなり、洞窟の中心で動物を焼いたりして食事をしていたことが分かっています。1万4～6000年前(2・3層)では大量の細石刃がつくられています。また、それまでになかった「土器」を作るようになります。イノシシの歯なども見つかったので、土器で煮炊きして食べていたのではないのでしょうか。1万年前(1層)の地層は本殿設置により削られてしまい、よく分かりませんが、福井川で採れる安山岩から石槍を製作し、照葉樹の森の中で狩猟を行っていたことが洞窟周辺の調査から推察されます。福井洞窟周辺では、その後、弥生時代の土器が数点発見されますが、生活の痕跡は少なくなります。戦国時代になり、近くの直谷城跡の鬼門(北東)に位置するため神社が安置され、現在の福井稲荷神社の前身になったとも考えられています。



### 旧石器人の洞窟ぐらし



**炉** 炉(幅52cm×長さ60cm)約1万7700年前(12層)のもの。洞窟中央の日当たりの良い乾燥した場所で発見。土や石が赤く焼けたことが良くわかる良好な状態で出土した。焼けた石は約300℃以上の熱を受けていたと推定されている。

### 石敷

石敷(幅2m以上×長さ1.6m)約1万9000年前(13層)のもの。洞窟の出入り口、岩ひさしの下あたりで検出。角ばった玄武岩の石の平らな面を上にしてしている。





18000年の時を越えて、  
旧石器人と我々現代人との  
対話が始まった。

平成23年5月22日、落石の無遺物層を削岩機で  
やっと掘りぬいたと思いはじめていた。

前日、半世紀前の調査時の駄目押しのトレンチビットを見つけ、  
諸先生の熱意に圧倒されていた。「この地層から後2mは何もない…」  
そう思い込んでいた。

昼前、粘土がまばらに混じる地層が  
綺麗な砂の層に変わりだした。

一瞬、黒く耀る石が目飛び込んできた。  
その後、次々と石器が見つかり、現場が湧きたってきた。  
洞窟の地面から4m下で黒曜石の細石刃を製作した場所が発見された瞬間だった。

写真：18000年前（12層） 炉跡周辺の細石刃出土状態  
遺物1点1点を三次元データ測量するため竹串をたて記録をとる。



# 03 福井洞窟の出土品

## 福井洞窟は旧石器文化と縄文文化をつなぐ「文化の橋」

～各地層の出土品から、道具の変化が読みとれる～

①細石刃 (さいせきじん)	縄文時代 1万3000年前	⑤ ① ② ③	2層	縄文土器と細石刃が 同じ地層から出土! 2層が爪形文 3層が隆起線文 と土器の文様も変化		
②細石刃核 (さいせきじんかく)		⑤ ① ② ③	3層			
③爪形文土器 (つめがたもんどき)		⑤ ① ② ④	4層		4層から下には土 器がない! 形のととのった石槍や スクレイパーが作られる	
④隆起線文土器 (りゅうきせんもんどき)		旧石器時代 1万7000年前	⑤ ① ② ④	7・9層	上下の層とは全く違う 石器が出土。細石刃文化 のなかで細石刃を 作らない集団!?	
⑤スクレイパー			⑤ ① ② ④	12層		炉跡を発見! 炉の周りで300点の 石器を確認。石器づくりを していた。
⑥小石刃 (しょうせきじん)			⑤ ① ② ④	13層		炉跡や石敷を発見! 細石刃の出現時期。 幅広の細石刃が特徴的
⑦小石刃核 (しょうせきじんかく)		1万8000年前	⑤ ① ② ④	14・15層	主に安山岩から石器を 作る。数点の黒曜石の 剥片を確認! 年代ははっきりしないけど、 細石刃文化とは 明らかに違う	
⑧石錐 (いしきり)			⑤ ① ② ④	14・15層		
⑨剥片 (はくへん)			⑤ ① ② ④	14・15層		
⑩石核 (せっかく)		1万9000年前	⑤ ① ② ④	14・15層		
⑪黒曜石 (こくようせき)			⑤ ① ② ④	14・15層		
⑫安山岩 (あんざんがん)		1万9000年前	⑤ ① ② ④	14・15層		

### 第1トレンチ出土遺物

第1トレンチでは約7万点の遺物が出土しました。これまでの遺物を合わせると20万点に及ぶ可能性もあります。地層ごとに石器や土器を比べることで細かな変化の違いを読み解くことができます。そこから当時の人たちの技術や集団の個性を調べることができます。

## さまざまな出土品

### 小さな石器の大きな狩猟具(細石刃と細石刃核)



イラストのような工程で丸い黒曜石から細石刃を剥ぎ取り、槍の先端につけたり、取りかえをしたりして利用したことが分かってきました。

旧石器時代(約1万8000年前=12層)の細石刃と細石刃核  
50点ほどくっついた細石刃核が2個体発見

### 縄文時代草創期(約1万3千年前)の動物骨



2層の細石刃。顕微鏡で拡大。すると使った時にできる刃こぼれを発見。同じ層から見つかった焼けた骨には石器によるキズを発見した。



サバの尾っぽの骨 イノシシの歯。うり坊から成長したぐらいの大きさ。

縄文時代になると水陸にまたがる資源を利用していたことが分かってきました。

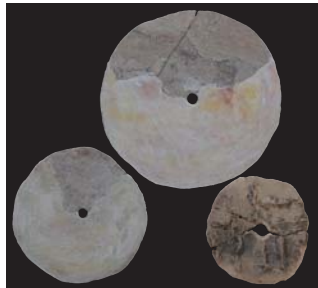


### 土器の中からある植物を発見

遺跡から出土した土器のかけらをCTスキャンにかけてその窪みの中から復元された繊維を調べてみると・・・。粘土のなかには「シダ植物」が練りこまれていることが分かりました。



### 特殊な道具：有孔円盤形土製品と石製品



土製品が1点 (直径65mm×厚さ5.5mm)。  
 砂岩の石製品が2点 (直径110mm×厚さ6.1mm・直径80mm×厚さ4.4mm)。いずれも中央に孔をあけています。隆起線文の有孔円盤形土製品は土器として利用したのち、第2の道具として再利用したものと考えられます。一説にはペンダントなどの装飾品、或いは集団の中心人物が頭につけるような祭祀的道具との見解もあります。土器がつくられ始めたこの時期の土製品は世界的にみても極めて希少な事例です。

昭和38 (1963) 年の発掘調査で第2トレンチから出土 (写真：東北大学大学院提供)

### 安山岩の原産地と石器



豊富な資源により定型化した石器 (皮なめしの道具など) がつくられた。

福井洞窟の前を流れる福井川。安山岩の原石がたくさんとれる。

### 西北九州における先史時代の洞窟での営み



旧石器時代 (1万8000年前) の洞窟での暮らし

旧石器時代～縄文時代 (1万6000年前) の洞窟での暮らし

福井洞窟の発掘調査によって、約1万9000年前の旧石器時代から約1万年前の縄文時代までの洞窟での生活の変化が分かってきました。

欧州とは異なり日本では旧石器洞窟はほとんど見つかっていません。それは、発掘調査が落石などによって旧石器時代の地層まで到達しないことも考えられますが、当時の旧石器人にとって遊動する生活では、固定した天然の居住空間は不向きだったとも考えられます。

しかし、旧石器時代も終わりにさしかかると更なる気候の変動に対して人類は新たな適応を迫られます。元々平地の少ない西北九州において砂岩地形のちなす洞窟は大変な魅力だったことでしょう。今よりも数m大きな間口の福井洞窟では火で暖をとりながら、石器づくりを行い、明日の狩りについて相談していたかもしれません。福井洞窟の発掘調査によってこうした旧石器時代の洞窟での暮らしの様子が初めて分かってきました。

縄文時代になると、さらに居住的要素は強まります。作られる細石刃の数量は増加し、いくつもの工程が必要な「土器」が製作されます。人類の革新的道具である土器の出現がもたらした歴史のカギを握る遺跡が福井洞窟であり、近隣にある泉福寺洞窟や岩下洞穴と重ねることで、さらに重厚な人類の歴史を紐解くことができるのです。



縄文時代早期 (1万年前) の洞窟での暮らし



## 佐世保の洞窟遺跡群 ～ 洞窟遺跡日本一のまち佐世保 ～



### ② 直谷岩陰

◆佐世保市吉井町直谷

旧石器時代・縄文時代草創期・前期・弥生時代後期  
(約40,000?・15,000・4,000・1,800年前)の遺跡。

福井川中流域、標高74mの岩陰に位置する。昭和35(1960)年の洞穴遺跡調査団により発掘調査が行われた。平成18(2006)年に佐世保市が再調査を行って以降、断続的に発掘調査が行われている。  
旧石器時代の終りから縄文時代草創期では、福井洞窟との関係性を示す資料が多く見つかった。また、最下層の年代が40,000年を越える他と安山岩製の石器が発見されている。今後の人類史を考える上でも重要な遺跡として期待できる岩陰遺跡である。



### ③ 市史跡 橋川内洞窟(昭和64年市指定)

◆佐世保市吉井町橋川内

縄文時代早期～晩期・弥生時代早期  
(約10,000～2,000年前)の遺跡。

佐世保市の北部を流れる佐々川中流域の左岸、標高113mに位置する。間口13mと大きな洞窟で北東に面して開口し、日当たりはあまりよくないが、近くに水が湧くなど、条件にめぐまれている。  
昭和45(1970)年に長崎大学医学部により発掘調査が行われた。  
遺物は土器、石器、骨角器がある。シカの脛骨(足の骨)を用いたへら状の骨角器は珍しい。特に、縄文時代早期の拠点的な遺跡である。



### ④ 岩谷口第2岩陰

◆佐世保市世知原町

縄文時代早期・後晩期・古墳時代  
(約10,000・4,000・1,500年前)の遺跡。

佐世保市の北部を流れる佐々川中流域の右岸、標高90mに位置する。南側に面して4つの洞窟が開口し、近くに水が湧くなど、条件にめぐまれている。  
昭和41(1966)年に古代学協会を中心に発掘調査が行われた。  
古墳時代の内行花文鏡片が出土しており、古墳時代の祭祀的洞窟の利用を示す事例である。また縄文時代後期初頭の土器と腰岳産黒曜石を利用した鈴桶技法の剥片鏃が多量に出土している。出土遺物は市指定文化財となっている。

### ⑤ 市史跡 大悲観岩陰(昭和55年市指定)

◆佐世保市小佐々町小坂

縄文時代早期・前期・後期  
(約10,000・6,000・4,000年前)の遺跡。

海に近く、白ノ浦を南西方向に見る丘陵部にある標高20mに位置する。昭和53(1978)年、佐世保考古学研究会により発掘調査が行われた。  
縄文時代早期・後期にはカキヤハイガイなどの貝殻が灰や土器・石器と一緒に見つかり、佐々川流域の拠点の遺跡とも考えられる。また、塔状になった砂岩の残丘の一つには、「大悲観」の文字が刻まれ、江戸時代後期には平戸八景の一つに数えられている。現在、この一帯は大悲観公園として整備されており、国指定の名勝となっている。



### ⑥ 御橋観音(国指定名勝 石橋)

◆佐世保市吉井町

江戸時代後期(約400年前)の遺跡。

佐世保市北部を流れる佐々川中流域の右岸、標高120mに位置する。洞窟の壁面部分が崩落し、橋が架かったような奇岩地形である。洞窟地形の最終形態を示すものと考えられ、長さ30m幅5mで、江戸時代には人が往来できるほどだったといわれる。遺物はないが、江戸時代後期には平戸往還沿いに設けられた平戸八景の一つ「石橋」として紹介され、現在国指定名勝となっている。また、洞窟に繁茂するシダ植物群落は国指定天然記念物に指定されている。



### ⑦ 史跡 泉福寺洞窟(昭和61年国指定)

◆佐世保市瀬戸越1丁目

旧石器時代終末・縄文時代草創期～早期  
(約16,000～10,000年前)の遺跡。

佐世保市の中心部を流れる相浦川中流域の左岸、標高89mに位置する。南側に面して4つの洞窟が開口し、近くに水が湧くなど、条件にめぐまれている。昭和44(1969)年に中学生が発見し、麻生優氏を中心に10年にわたる発掘調査が行われた。  
我が国の縄文時代のはじまりを示す遺跡として、国の指定を受け、出土遺物5万点のうち「豆粒文土器」をはじめとする土器8個体、石器1,956点が国の重要文化財に指定されている。



### ⑧ 県指定 岩下洞穴(昭和44年県指定)

◆佐世保市松瀬町

縄文時代早期～前期(約10,000～6,000年前)の遺跡。

泉福寺洞窟の対岸にある石盛岳南斜面の砂岩露頭、標高200mに位置する。昭和39(1964)年から4回にわたり麻生優氏により発掘調査が行われた。  
縄文時代早期と前期の30体人骨が確認され、墓域としての洞窟の利用が明らかとなった。近年、国立科学博物館による分析により、短命で華奢な狩猟採集生活を営んだ縄文人の実態が明らかとなってきた。国内屈指の人類遺跡といえる。







⑨ 県指定 下本山岩陰 (平成19年県指定)

◆佐世保市下本山町

縄文時代前期・後期・弥生時代後期  
(約6,000・4,000・1,800年前)の遺跡。

相浦川下流域、標高10mの当時の河口に近い岩陰に位置する。昭和45(1970)年に2回にわたり発掘調査が行われた。  
縄文前期から弥生時代の墓域と生活跡で、明見川に面した砂岩露頭に開口30m×奥行き約4m×庇高約3m程の岩陰を利用している。  
特に、縄文時代には4体の埋葬人骨と縄文前期にはインシシ等の哺乳類、鳥類、魚骨、貝類や土器、石器類が数多く出土し、釣針等の漁労具や貝輪、ペンダント等の装飾品も出土している。弥生時代には、箱式石棺に二体の埋葬人骨が検出され、弥生時代には墓域としての利用がうかがい知れる。



⑩ 龍神洞穴 (国指定名勝 福石山)

◆佐世保市福石町

平安時代～鎌倉時代・江戸時代  
(約1,000～800・400年前)の遺跡。

烏帽子岳から延びる丘陵の先端、標高25mに位置する。西側に開口した岩陰地形で、当時は佐世保湾に面していたが、現在は埋立地となっている。  
土師器や須恵器、滑石製石鍾とともに、マガキや岩礫性の巻貝が出土しており、当時の漁労の居留地と推定されている。江戸時代後期には平戸往還沿いに設けられた平戸八景の一つ「福石山」として紹介され、現在、国指定の名勝となり、「福石観音」の愛称で地域に親しまれている。



⑪ 牽牛崎洞穴

◆佐世保市日野町

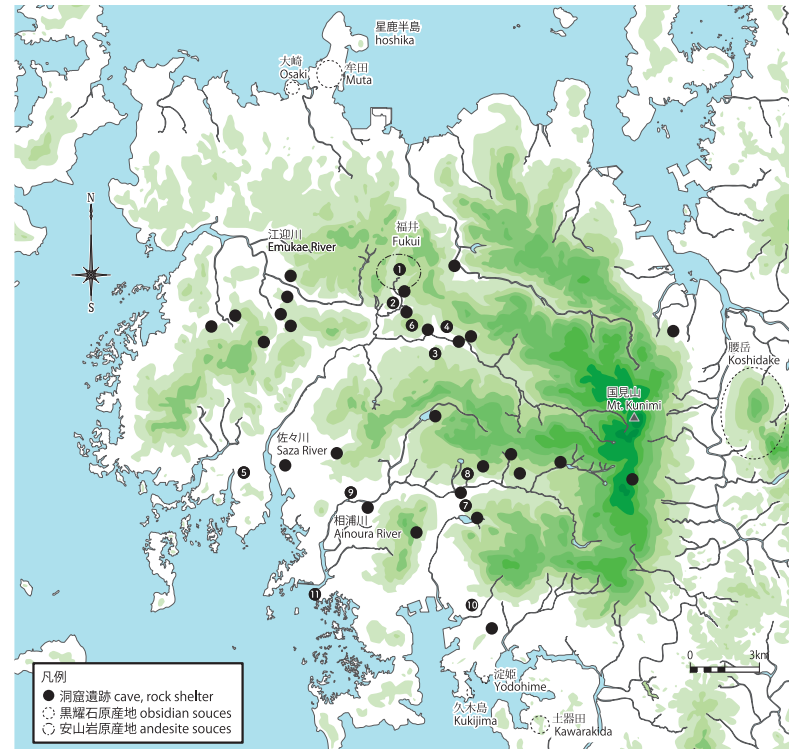
室町時代(約600年前)の遺跡

西海国立公園九十九島の海面を望む海食崖下にある。標高3mと低く、満潮時には海岸線まで30cmとない。南向きに開口し、洞窟内に残る軽石は鬼界カルデラの噴火で噴出したものが流れ着いたものと推定されている。  
14世紀の中国景德鎮系の白磁と土師器が出土している。岩礫性の巻貝が数量のみ出土しており、一時的な利用と推定されている。


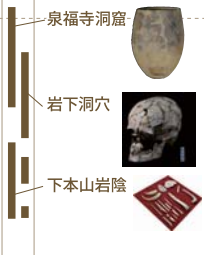





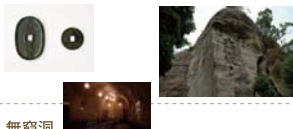
日本考古学協会による西北九州の発掘調査から佐世保市域の発掘史は始まります。福井洞窟の調査は、続く岩下洞穴、下本山岩陰、泉福寺洞窟の学術調査へつながり、平成30(2018)年時点31か所の洞窟遺跡の発見となりました。その数もさることながら、洞窟に残る人類の歴史と、その学史を総括すると質・量ともに国内屈指の洞窟遺跡の都市といえます。先史の時代から現代まで洞窟遺跡を軸に史が語れる都市は他にありません。まさに「洞窟遺跡日本一のまち佐世保」たる由縁ではないでしょうか。



昭和39(1964)年。岩下洞穴の前で土器片を見る研究者たち(右から芹沢長介氏、石丸太郎氏、内藤芳篤氏、麻生優氏、小田静夫氏 撮影者:蓮田知則氏)

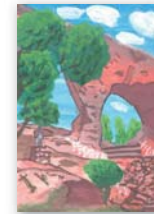




年代	地質年代	時代	福井洞窟	佐世保の洞窟遺跡群
40000年前	更新世	旧石器時代		直谷岩陰 泉福寺洞窟・岩下洞穴 孤田洞穴 不動明王谷岩陰 上直谷岩陰・直谷岩陰
16000年前		縄文時代		泉福寺洞窟 岩下洞穴 下本山岩陰 天神洞穴 大門洞穴・中通洞穴 大悲観岩陰 岩谷口第1・2岩陰 牧ノ岳洞穴
2000年前	完新世	弥生時代		泉福寺洞窟 大門洞穴 天神洞穴 岩谷口第1・2岩陰 中谷洞穴 直谷岩陰 大悲観岩陰
1800年前		古墳時代		岩谷口第2岩陰 池野谷洞穴 岩下洞穴 天神洞穴
1400年前		古代		泉福寺洞窟 長谷岩陰
1000年前	中世			泉福寺洞窟 長谷洞穴 直谷岩陰
400年前			近世	
	現代			不動明王谷岩陰 平戸八景(高岩・御橋観音・大悲観・福石山) 無窮洞

※東北大学大学院提供

洞窟遺跡を通じた教育と地域の取り組み



最優秀賞

中里小学校6年  
ことし ひろし  
後藤 広志  
「眼鏡岩」

優秀賞



大塔小学校5年 狩集 百葉  
「眼鏡岩」



花高小学校6年 山下 鈴乃  
「いろんな土器たち」



吉井北小学校6年 川原 睦  
「福井洞窟」



相浦小学校4年 津本 はなよ  
「泉福寺どうくつで見つけた豆粒土器」

佐世保市教育委員会では郷土愛の醸成と文化財啓発の一環として平成14(2002)年から市民向けの郷土史体験講座を開催しています。また、「歴史教育副読本」を刊行し各小中学校に配布しているほか、中学1年生には「ふるさと歴史発見」授業として各地の史跡めぐりを行っています。平成30(2018)年度は、市内小学生に史跡イラスト募集を行いました。そのほか、出前講座「福井洞窟」を行うなど、地域学習の場を提供しています。教科書にはない旧石器時代から地域の歴史散策まで幅広く学習を行うことで地域への関心が高まっています。

平成30(2018)年には吉井各地区の文化財保存会で構成される「吉井地区文化財保存連絡会」が創設されました。各保存会では地域のお祭りなどの伝統行事のほか、福井洞窟や橋川内洞窟や直谷城跡、石橋群などの清掃、見学案内など地元で根ざした地道な活動が行われています。10年後、20年後・・・50年後も子供たちに受け継がれる文化財であってほしいと願っています。



文化財＝地域の宝

